

父性に関する研究

—男子大学生と妊婦の妻を持つ男性の父性意識の差—

前田 規子¹・中尾 優子¹・宮原 春美¹

要 旨 今回、N大学医学部附属病院産科外来及びN市内の産婦人科医院を受診中の妊婦の夫（107名）、N大学一年次生男子（196名）を対象に、父性意識として対児感情と育児動機の影響因子について質問紙調査を実施した。

その結果、

1. 対児感情では、学生と夫、子どもの有無で回避得点、拮抗指数に有意差があった。
2. 育児動機について、学生と夫、子どもの有無で育児動機得点に有意差があった。

対児感情、育児動機は、ともに父親としての役割意識が影響をしていると思われる。父性意識の発達を促すため看護職者として、現在の核家族化、少子化の中で、父親となる以前の早期から人との関わりの中で役割を持つ機会を提供していく必要があると考える。

長崎大学医学部保健学科紀要 15(2): 51-54, 2002

Key Words : 父性, 対児感情, 育児動機

はじめに

近年、母性に関する研究が多領域で盛んに行われるようになってきた。一昔前までの「母性は生まれながらにして備った本能である」という母性信仰が一般的であったものが、近年では母性は形成され発達変容するという視点で捉える必要性¹⁾が言われるようになった。

一方これまでの父親に関する研究は母親に対するものと比べ少ない。これは育児の主体が母親であるとする認識が強く、そのため研究者の父親への関心は薄く、父親研究は低調なものであったと思われる。しかし、近年の家庭内暴力、非行、過疎化等の社会問題に伴う諸問題により家族とは何かが改めて問われ、それとともに父親の存在が注目され、父親に関する研究が増えてきた²⁾。これまでの研究では父親の育児参画が母親の精神的安定をもたらし、母親の育児姿勢や内容に好ましい影響を及ぼす³⁾と言われ、父親の児に対する意識が育児参画を左右するものと考えた。

そこで今回、男子大学生と妊婦の妻をもつ男性を対象に、対児感情と育児動機の差を調査し、影響要因について検討した。

研究方法

1. 調査対象

N大学病院医学部附属病院産科外来およびN市内の産婦人科医院を受診中の妊婦の夫（以下夫とする）107名、N大学1年次生196名の計303名を対象とした。

2. 調査期間

調査期間は平成12年7月24日から9月8日である。

3. 調査方法

妊婦の夫については、この調査の趣旨に同意の得られた妊婦を通じて夫への質問紙調査を依頼し、回答は郵送してもらった。男子大学生については、N大学で全学教

表1. 赤ちゃんのイメージ評定表

【仕方の説明】
あなたは“赤ちゃん”を頭に思い浮かべた時に、どのような感じがしますか。下の言葉でみた時に、どの段階にあてはまるでしょうか。
あなたの気持ちに合うところに○をつけてください。
あまり深く考えないで、直感的に判断してください。

非常に そのと おり	そのと おり	少し そのと おり	そんな はない	非常に そのと おり	そのと おり	少し そのと おり	そんな はない
あたたかい……	→	→	→	あかるい……	→	→	→
よわよわしい……	→	→	→	なれなれしい……	→	→	→
さわりたい……	→	→	→	そばにいたい……	→	→	→
うれしい……	→	→	→	あまい……	→	→	→
はずかしい……	→	→	→	めんどくさい……	→	→	→
おんぶしたい……	→	→	→	わらわせた……	→	→	→
すがすがしい……	→	→	→	たのしい……	→	→	→
くるしい……	→	→	→	こわい……	→	→	→
あやしい……	→	→	→	見ていたい……	→	→	→
いじらしい……	→	→	→	みずみずしい……	→	→	→
やかましい……	→	→	→	わずらわしい……	→	→	→
ぞだてたい……	→	→	→	くちづけたい……	→	→	→
しろい……	→	→	→	やさしい……	→	→	→
あつかましい……	→	→	→	うっとりしい……	→	→	→
だっこしたい……	→	→	→	そい寝したい……	→	→	→
ほほえましい……	→	→	→	うつくしい……	→	→	→
むずかしい……	→	→	→	じれったい……	→	→	→
はなしかけたい……	→	→	→	ほほずりしたい……	→	→	→
ういういしい……	→	→	→	すばらしい……	→	→	→
てれくさい……	→	→	→	うらめしい……	→	→	→
乳をあげたい……	→	→	→	手をにぎりたい……	→	→	→

育を受講している学生に対して集合法にて質問紙を配布し、後日回収した。

調査内容は、花沢の「赤ちゃんイメージ評定表」⁴⁾ (表1)を用い、対児感情として肯定的な項目、否定的な項目、育児動機の項目についてそれぞれ14項目の質問を4段階法でできた。“非常にそのとおり”を3点、“そのとおり”を2点、“少しそのとおり”を1点、“そんなことはない”を0点とし、肯定的質問の合計点を接近得点、否定的質問の合計点を回避得点および育児動機質問の合計点を育児動機得点として点数化した。また、拮抗指数は回避得点を接近得点と回避得点の和で割ったものに100をかけたものとした。接近得点と回避得点とが同点になったときは50になる。50以下の低指数になるほど、接近得点のほうが高くて両感情の拮抗度は低く、50以上になるほど回避得点のほうが高いことを示す。

4. 分析方法

得られた結果は、学生と夫、家族形態、弟妹の有無、子どもの有無においてF検定の後、スチューデントのt検定またはウェルチのt検定を行った。有意水準を5%として有意差の検定を行った。

結 果

1. 回収率

調査対象303名中回収できたものは153名(50.5%)で、うち有効回答は125名(41.3%)であった。

2. 対象の属性

対象の属性は、夫50名、学生75名で家族形態別、子どもの有無、妹および弟の有無については表2に示す。

表2. 対象の概要

		学生(75名)	夫(50名)
子どもの有無	有	0名	25名
	無	75名	25名
妹・弟の有無	有	50名	33名
	無	25名	17名
家族形態 (幼少時)	拡大家族	20名	7名
	核家族	55名	43名

3. 対児感情

1) 学生と夫での比較

学生と夫間で得点の差をみた。接近得点については、学生、夫間に有意差はみられなかった。回避得点については、学生の平均点は11.62点、夫は8.16点であり、両者間に有意差がみられた。拮抗指数については、学生の平均点は32.8点であり、夫は23.4点であり、両者間に有意差がみられた(表3)。

表3. 学生と夫での対児感情得点平均の比較

群	接近得点 平均 (SD)	回避得点 平均 (SD)	拮抗指数 平均 (SD)
学生 n=75	22.7 (9.2)	11.6 (7.4)	32.8 (16.6)
夫 n=50	25.3 (7.7)	8.16 (5.6)	23.4 (11.9)
t	1.64	-3.0*	-3.69*

*P<.05

2) 家族形態での比較

核家族と拡大家族での得点の差では、接近得点、回避得点、拮抗指数いずれにおいても、核家族と拡大家族では有意差はみられなかった(表4)。

表4. 家族形態別での対児感情得点平均の比較

群	接近得点 平均 (SD)	回避得点 平均 (SD)	拮抗指数 平均 (SD)
核家族 n=98	24.2 (8.5)	9.7 (6.6)	27.5 (14.6)
拡大家族 n=27	22.0 (9.3)	12.4 (8.0)	34.9 (17.8)
t	1.2	-1.8	-2.2

*P<.05

3) 子どもの有無での比較

子どもの有無で得点の差をみた。接近得点において子どもの有無で有意差はみられなかった。回避得点では子ども有での平均点は6.8点、無では11.1点であり有意差がみられた。また、拮抗指数において子ども有での平均点は20.6点で、無では31.2点であった(表5)。

表5. 子どもの有無別での対児感情得点平均の比較

群	接近得点 平均 (SD)	回避得点 平均 (SD)	拮抗指数 平均 (SD)
有 n=25	25.7 (8.6)	6.8 (4.6)	20.6 (12.3)
無 n=100	23.3 (8.7)	11.1 (7.2)	31.2 (15.6)
t	-1.24	2.6*	3.17*

*P<.05

4) 妹・弟の有無での比較

兄弟で自分の下に妹及び弟の有無での得点の差をみた。

接近得点、回避得点、拮抗指数のいずれにおいても有意差は認められなかった（表6）。

表6. 妹・弟の有無別での対児感情得点平均の比較

群	接近得点 平均 (SD)	回避得点 平均 (SD)	拮抗指数 平均 (SD)
有 n=83	23.0 (8.9)	10.1 (6.6)	29.5 (15.4)
無 n=42	25.2 (8.2)	10.4 (7.7)	28.2 (16.1)
t	1.3	0.16	-0.45

* $P < .05$

4. 育児動機（表7）

1) 学生と夫別での比較

学生と夫の間では、学生の育児動機得点の平均点は22.0点、夫は27.6点であり有意差がみられた。

表7. 育児動機得点

群	平均	標準偏差	t
学生	22.0	10.4	3.3*
夫	27.6	8.0	
核家族	24.7	9.9	1.1
拡大家族	22.4	9.7	
子ども有	27.8	8.0	-2.08*
子ども無	23.3	10.0	
妹・弟有	24.1	10.0	0.23
妹・弟無	24.5	9.6	

$p < .05$

2) 家族形態での比較

家族形態において、核家族と拡大家族の間には育児動機得点に有意差はみられなかった。

3) 子どもの有無での比較

子ども有での平均点は27.8点であり、無では23.3点で有意差がみられた。

4) 妹・弟の有無での比較

妹・弟の有無間において有意差はみられなかった。

考 察

1. 対児感情

「学生と夫」別では、回避得点と拮抗指数に有意差がみられた。これらの比較において接近得点では有意差はみられず、拮抗指数の有意差は回避得点に影響していると思われる。学生に比べ夫は、子どもに対する肯定的感情が強く、これは安藤氏らが父性意識は直接子どもと関わるなかで形成される⁵⁾と述べているように子どもと接

する経験をとおして肯定的な対児感情が形成され则认为られる。

「子どもの有無」別では、回避得点と拮抗指数に有意差がみられた。子ども有り群は、他の属性別でみた中で接近得点が最も高く、また回避得点および拮抗指数は最も低かった。つまり、子ども有り群は、最も子どもに対して肯定的であるといえる。柏木は、誕生したばかりの子どもは自己主張的であり、自分の要求に対する親の対応を求めて絶えずさまざまな信号を送っており、親の側からの察しや、思いやり、共感が強く求められる、つまり、親になることで自己愛から他者の受容、対象への愛の転換について述べている⁶⁾。親になるということは、子どもに対する関心だけでなく責任と義務が付加され、自分との関係を築いていくことから現実的な関心として認識され、変化していくものと考えられる。

「家族形態」別および「妹・弟の存在」に関わらず対児感情には有意差はみられなかった。この結果からは対象者の小さな子どもに関わった経験について不明であるが、岡らの調査から、乳児との接触経験のある群がない群に比べ有意に子ども肯定因子得点が高かった⁷⁾と述べている。つまり、近年の少子化および核家族化により子どもに関わる機会は少なくなり、接近得点に影響する可能性があると考えられる。

2. 育児動機

今回の結果では「学生と夫」、「子どもの有無」で有意差がみられた。夫そして子ども有り群は、子どもの存在が現実あるいは現実になろうとしている状態であり、家族の中での自分自身の役割を取得またはその準備を整えている段階であると考えられる。新道ら⁸⁾は、父性意識は、子どもが好きというたんなる気持ちではなく、自分の子どもへの特別の感情、保護・養育することの責任と義務に裏づけされ、あるいは厭わない愛情（子どもとの強い絆）である、と述べている。子どもの存在が現実あるいは現実になろうとしている状態が役割意識を高めるものと考えられる。また田中らは、今の社会を子どもたちから多くの人とかかわったりいろいろな役割を経験してみることが奪われている、父性や母性を発揮できる機会が極端に少なくなっている⁹⁾と指摘している。役割意識をこういったことから、育児をサポートする我々看護職者は意識的に子どもの関わりを持つ機会を提供していく必要がある。

ま と め

1. 対児感情では、学生と夫、子どもの有無で回避得点および拮抗指数に有意差がみられた。

2. 育児動機について、学生と夫、子どもの有無で育児動機得点に有意差がみられた。

終わりに

今日、家族の中での男性が果たすべき役割は家族を養うという経済面から家事、育児への参加へと認識は変容し、父性の発達について検討され始めている。

今回の調査では、対児感情、育児動機は、ともに役割があるかどうかで差がみられた。父性意識の発達を促して行くためにも看護職者として、現在の核家族化、少子化の中で、人との関わりの中で役割を持つ機会を提供していく必要があると考える。

文 献

1. 大日向雅美：母性の研究，川島書店，東京，1996，pp246.
2. 大日向雅美：母性の研究，川島書店，東京，1996，pp260.
3. 中川英一：父親の育児参画を促す社会に向けて，家族看護学研究会，第4巻2号：104-108，1999.
4. 花沢成一：母性心理学，医学書院，東京，1992，pp242.
5. 安藤昌代，森島昭子，川島ひとみ，真鍋智恵，笹田麻美，森前光子，伊藤邦彦：父親の育児参加についての位置考察，母性衛生，第38巻3号：343，1997.
6. 柏木恵子：父親の発達心理学 父性の現在とその周辺，川島書店，東京，1996，pp326.
7. 岡恵美子，外間登美子，坂元良子：乳幼児との接触経験と父性意識について—男子学生のアンケート調査より—，思春期学，第17巻1号：130-133，1999.
8. 新道幸恵，和田サヨ子：母性の心理社会的側面と看護ケア，医学書院，東京，1990，pp123.
9. 田中義人，永田真弓，宮里邦子：父性の発達の父子関係の形成，小児看護，第21巻7号：823-826，1998.